

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00119

研究課題名（和文）14世紀キリスト教霊性における神化思想の受容と展開：エックハルトとゾイゼを中心に

研究課題名（英文）The Reception and Growth of the Doctrine of Deification in the Christian Spirituality of the Fourteenth Century: Focusing on Eckhart and Suso

研究代表者

阿部 善彦（Abe, Yoshihiko）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：40724266

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では以下のことを明らかにした。キリスト教および哲学の歴史はゾイゼもエックハルトもともに断罪し、排斥してきた。ながらく忘却されてきたエックハルト、ゾイゼによれば、「存在」「知性」「一」はことごとく「生み・生まれる」ことに流れいるのであり、その意味において「生命」「誕生」が根本概念となっているのである。神性のはたらきとは、エックハルトが、聖書および教父たちにもとづいて述べているように、生むこと、誕生にほかならない。「魂における神の誕生」は、キリストの受肉による救済に対するこれ以上ない感謝と信仰の表現の伝統、つまり、教父たちが深めてきた神化思想の伝統に連なるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は宗教交流の場を拓く。エックハルトが説く「魂における神の誕生」によれば、人間はみな、父なる神から生まれた兄弟姉妹であり、父の胎内の生において、ともにいのちと愛を感じ、ともに生きることができる。これは旧約聖書における神の憐れみ、慈しみを示すヘブライ語に「ラハミーム」母の胎、子宮も意味する語、および、新約聖書のギリシア語の「スプランクニゾマイ」同じように体内・胎内の言葉で語られる父なる神の無償の愛とあわれみに通じる。この宗教霊性は「如来蔵」（ターガタ・ガルバ）「如来の胎」という意味で説かれる如来の胎内の生に比せられる。また神化思想にかんして東方キリスト教との相互理解を拓く。

研究成果の概要（英文）：The history of Christianity and philosophy have condemned and negated both Suso and Eckhart. According to Eckhart and Suso, who have been forgotten for centuries, Being, Intellect, and the One are all in their innermost reality nothing other than divine giving and receiving birth, and in this sense "life" and "birth" must be held to be the most fundamental concepts of Eckhart. As Eckhart states based on the Scriptures and the Church Fathers, the energiea of divine essence is nothing other than birth, or giving birth. The birth of God in the soul is the most important expression of gratitude and faith in Christ's incarnational salvation, and derives from the tradition of deification developed by the Church Fathers.

研究分野：キリスト教思想史

キーワード：エックハルト 魂における神の誕生 神化思想 ゾイゼ 霊性 エネルゲイア

1. 研究開始当初の背景

思想史的には「神化思想」は中世後期以降、教会と神学から攻撃・排除の対象となり、近代以降のプロテスタント教会も含めた西側の「近代化」した教会と神学からは、「神化思想」は異端的・土俗的「汎神論」にすぎないと見下され、それに固執し抜け出せない東方教会とその神学はもはや純粋なキリスト教とは言えないと侮蔑的に断じられた。西方キリスト教思想では「神化思想」が今日に至るまでほとんど黙殺・忘却されてきたことの問題性は、ようやく20世紀末になって自覚されるようになってきた。ふりかえると、神化思想は、とりわけ、西洋近代のキリスト教研究では十分な注意が払われてこなかったのであり、プロテスタント神学では、受肉論と一体的な神化思想の救済論が、純粋にキリスト教信仰由来のものではなく、肉体の神的不死性を目指した異教的誤謬(物質的救済論)の混交であると誤解され、キリスト教信仰純化のためにも排除すべきものとされた。また、宗教改革以降の近世以降のカトリック神学も、神化思想を汎神論的思想と同一視し、十分に理解してこなかった。しかし、初代教会と教父の伝統を独自の仕方を守る東方キリスト教会は、神化思想を今日なお一貫して信仰と神学の中心テーマとしている。そのため、カトリック、プロテスタント神学の神化思想に対する理解・態度は、そのまま、東方キリスト教会に対する誤解・無理解を映し出すものとなっている。こうした状況の中で、20世紀後半以降、たとえば、東方キリスト教の伝統が生きるロシアと隣接するフィンランドのルター派神学者たちから、神化思想への反省と再評価がおこり、ルター神学を神化思想の観点から再読することを通じて、ロシア正教とルター派教会のエキクメニカルな対話が試みられている。こうしたことに見られるように、神化思想研究が、エキクメニカルな諸派の対話・相互理解にとって、今後、不可欠な研究であるとの認識はますます高まっていると言える。

2. 研究の目的

「神化思想」を排斥・断罪するようになる西方教会の中世後期・近世以降の流れを決定的なものとした、13-14世紀の主要な出来事として、神学教授でもあり修道霊性の大家として俗語による女性たちの霊的指導にも尽力したマイスター・エックハルトの神化思想を標的とした教皇庁による異端断罪事件がある。本研究課題はエックハルトの「魂における神の誕生思想」を取り上げ、神化思想(Theosis)を中心とした14世紀のキリスト教思想史の根本動向を解明する。そのために、特に、神化思想の受容と展開に関して、同時期及び続く時代に大きな思想的影響を与えた14世紀のマイスター・エックハルトと、その弟子ハインリッヒ・ゾイゼの神化思想を研究対象とする。神化思想とは、ごく簡潔に言えば、人間が神的生命を生きる者となるという、キリスト教信仰の根幹をなす神学思想である。新約聖書の「神の本性にあずからせていただく者となる」(二ペトロー・四)という聖句が多く教父・神学者たちによって神化思想の典拠とされるように、神的生命に引き寄せられることで、人が神的生命を生きる者となることを意味する。もちろん、神化に似た考えは、神々の生を人間が目指す天上的理想とした古代ギリシャ・ローマにもあったが、神化思想が「受肉」(神が人となること)と一体的であるところに、キリスト教独自の特徴がある。「神のロゴスが人間となったのは、われわれが神になるためである」と4世紀の神学者アタナシオスが言うように、神の言・ロゴスであるキリストの誕生・受肉の意義は、人間神化の実現にあると理解される。神化による救済のためにこそ、神であるイエスは人間となった(受肉した)という、「驚くべき交換」とも呼ばれる、受肉と神化の理解が、キリスト教信仰の根本にあるため、その後の歴史において、神化思想は、様々に神学的に言語化され、かつ、様々な信仰実践の源泉となった。本研究は、初代教会から受け継がれた神化思想の受容と、その展開を中心に、これまで十分に解明の光が届いていない、14世紀キリスト教思想史の根本動向を解明する。

3. 研究の方法

本研究は以下の(1)から(5)の観点から行った。

(1) エックハルトの神化思想である「魂における神の誕生」思想を、オリゲネスを中心とした教父の伝統との連続性の観点から解明する。

エックハルトの神化思想は「魂における神の誕生」として、ラテン語の神学的論考やドイツ語の説教で説かれている。エックハルトはこの「誕生」思想を4世紀の教父オリゲネスの霊的誕生の思想から継承している。このことをエックハルトのラテン語およびドイツ語著作にもとづいて確認する。そこで特に、エックハルトが「誕生」を救済論の核心に据え、それを人間が神的生命により新たに誕生する神化思想として展開し、キリストとの一致において子として父から生み出され、生まれるという誕生のダイナミズムの連関に入ることとして理解していることを明らかにした。

(2) 「誕生」を通じて実現される「神化」の内容を、その神学的基盤となる教父以来の受肉論、三位一体論、キリスト論などの思想伝統との接点から解明する。

誕生がキリストと同じように父から子として生まれることであるとすれば、そこには、人間とキリストとの関係性、また、人間がいかにして、父と子との関係性に入るのかという、神学的問題が関わってくる。これに対して、エックハルトが、まず、受肉論にもとづいて、子が人間となることにおいて人間と同じく子となる救済がもたらされたとする、伝統的な「驚くべき交換」の受肉・神化理解の上に、「誕生」論を展開していることを、教父的伝統との関係が明確にされているラテン語著作を中心にして確認した。また、この「誕生」が、三位一体である父と子における「誕生」と同じであるとして、三位一体論の誕生におけるペルソナ・関係性が、誕生における神と人間のペルソナ性・関係性の原型となっていることを確認する。その際、カルケドン信条等に示される、教父以来の伝統的なキリストの人性と神性の関係をめぐるキリスト論が神化思想の神学的基盤となっていることを確認した。

(3) エックハルトの神化思想が、弟子のハインリッヒ・ゾイゼにおいてどのように受容されているかを、主に、『真理の書』によって解明する。

エックハルトの神化思想は上記のような教父的神学思想伝統を踏まえたものであるにもかかわらず、同時代に教会当局から異端的と判断された。そのため、ゾイゼの神化思想は、こうした否定的判断を克服し、エックハルトの神化思想の正統性の神学的に弁明することから出発している。それゆえゾイゼによるエックハルト弁明である『真理の書』を中心に、ゾイゼのエックハルト的神化思想受容を解明した。

(4) エックハルトとゾイゼの相違点を実践論の強調の度合いに基づいて解明する。

ゾイゼに特徴的とされる受難神秘思想は、実際には「十字架」を強調する神化思想である。エックハルトでは「誕生」が神化の中心であるのに対して、ゾイゼでは「十字架」における受難・死との一致によって人間が新たな「誕生」に至るという神化思想の独自の展開があった。そのため、キリストの受難に倣う実践論・禁欲的修行論が、エックハルト以上に、神化の道程として強調されている。以上のことを、ゾイゼ自身の信仰生活を記した自伝的著作『ゾイゼの生涯』を中心に解明した。

(5) ゾイゼの神化思想の実践論的展開に基づいて、14世紀以降のキリスト教霊性史の根本動向を解明し、また、東方キリスト教霊性との共通の基盤を探る。

ゾイゼは14 - 16世紀に広く読まれた思想家であり、彼の十字架中心的な神化思想における実践論・禁欲的修行論も、その後の多くのキリスト教著作家に受容された。ここでは特に影響の大きいフランドル神秘思想とデヴォチオ・モデルナの主要著作を取り上げ、神化思想の受容と展開の観点から14世紀以降のキリスト教霊性史の根本動向を確認した。また同時に、ゾイゼの実践論を、東方キリスト教の神化思想におけるシュネルギア(神人協働)論と比較し、東方霊性との共通の基盤を探索した。

4. 研究成果

これまで14世紀は哲学史的には「後期スコラ学」、神学史的には「神秘思想」「新しい敬虔」の時代として領域的に分断され、しかも、「神化思想」はいずれにおいても十分研究されてこなかった状況がある。これに対して、本研究は「キリスト教思想史」という観点から、哲学・神学というディシプリンを超えて、この時代を包括的な視点から主題化するとともに、「神化思想」が、まさにこの時代の思想史的状況における根本動向であることを解明することで、中世思想史研究に認識の刷新をもたらすことができた。

また、神化思想研究を通じて、東方キリスト教霊性との対話的相互理解に向けた、学問的課題を明らかにすることができた。近代以降のプロテスタント・カトリック神学の目には神化思想は、伝統を墨守して進歩がない東方キリスト教が頑迷に執着する汎神論的・異教的遺物としか映らず、また東方キリストも神化思想の欠落を西方キリスト教神学の欠陥として指弾してきたが、神化思想研究には、エキュメニカル的対話に向けた共通の基盤の探索を進める意義があり、実際、東方キリスト教研究者を交えた意見交換や発表の機会を設けることができた。

エックハルト、ゾイゼ研究に関しては、これまでエックハルトの「誕生」論はもっぱら新プラトン主義的「一」や「発出・還帰」の観点から論じられ、教父以来の神化思想伝統や、受肉論、三位一体論、キリスト論を基盤にしたものであることが十分に認識されてこなかった。しかし、エックハルト、ゾイゼにおける「存在」「知性」「一」の理解が、「生み・生まれること」「誕生」「生命」を根本概念として「魂における神の誕生」を通じて展開されているのであり、本研究ではこのことを明らかにした。

これと関連して、これまでのエックハルト、ゾイゼ研究では、「魂における神の誕生」よりも「離脱」「放念」に注目が集まる傾向があった。しかし、エックハルトが「魂における神の誕生」とともにドイツ語説教や論述で繰り返し説いた「離脱」「放念」またそれとならば「謙遜」「貧しさ」「沈黙」「砂漠」の教えとは、結局、キリストの生における無一物性にほかならないのであって、そのキリストの生における無一物性は、人間的知の対象として外化しえない父における神性の存在と生命の横溢によってのみ満たされており、それゆえに、そのうちにあるものは神的生

の以外のなにものでもないということ、そして、そうした生の無一物性に人間があずかることが、人間の禁欲的努力の成果によるものではないということ、さらに、それは、受肉による救済を完成させる神によって神的生命に満たされることで成就する、恩寵的な靈的変容にほかならないということ語っていることを本研究では明らかにした。

また、魂における神の誕生を実現するために、父における神性である、生む一へと入り込む必要があり、そのために、否定の暗夜を過ぎ越す必要があるが、このような否定の暗夜の過ぎ越しが、西谷啓治が述べていたように、三位一体の神を突破して神性の無に至ることではないことを明らかにした。エックハルトは確かに「名の無い神を求めるとして「突破」について語っているが、それは、父なる神への突破であり、しかも、同時に、父なる神を父とする子として生み出される誕生である。「名の無い神を求めるとして、三位一体の神を突破して神性の無に至ることとしてとらえることは、ただ、神を人間の手の届かない彼方なる領域に祭り上げることになりかねない。むしろ、エックハルトによれば、「突破」という否定の暗夜は、神的生命・誕生に至る道、産道とならねばならないのであって、そこで、わたしたちを、同じ子として、同じ父から生まれるものとする、受肉のロゴスの救済的はたらきが成就するのである。

それゆえ、本研究では以下のことも明らかになった。「突破」という否定の暗夜は、キリストがそうであったように、父にすべての信頼をかけて生き、父の完全な像的反復を成就する神の像であるとして、父なる神以外のものに対して、無一物に徹した受肉の生を生きることであり、それは、キリストが生きた無一物の生、自己無化(ケノーシス)にあやかって生きることである。したがって、また、エックハルトの言う「子であること」(filiatio)とは、そのように、父なる神の生命によって生きること以外のなにものでもない。確かに、人間は自分だけでは、こうした、「父」と「子」の永遠・完全な誕生における生命に対して、いかなる手立てもない。しかし、「子」が惜しみなく同じ人間となり、道となって「同じ子」へと人間を引き上げる。この「子」の受肉による救済によって人間に与えられるものは、「子」が「父」から受けとったものである。かくして、人間もまた「アッパ」(父よ)と叫ぶ靈に満たされて、父から完全な贈与を「同じ子」として受けとる者となる、「子であること」(filiatio) 魂における神の誕生 が、まさにいのちの最内奥的な出来事として、父なる神の生命によって生きること、キリストが生きた無一物の生、自己無化(ケノーシス)にあやかる生き方として実現するのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 阿部善彦	4. 巻 59
2. 論文標題 吉満義彦と日本のカトリシズムの問題：1937年以降の活動を中心に（前編）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 キリスト教学	6. 最初と最後の頁 27-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 阿部善彦	4. 巻 60
2. 論文標題 吉満義彦と日本のカトリシズムの問題：1937年以降の活動を中心に（後編）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 キリスト教学	6. 最初と最後の頁 35-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 阿部 善彦	4. 巻 12
2. 論文標題 エックハルトとアンリ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20678/henrykenkyu.12.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yoshihiko ABE	4. 巻 201
2. 論文標題 Incorporatur Christo: Unio as the Eucharistic and Incarnational Transformation in Meister Eckhart	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Theologische Quartalschrift	6. 最初と最後の頁 202-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿部善彦	4. 巻 63
2. 論文標題 研究ノート エックハルトにおける知的存在者としての人間	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 キリスト教学	6. 最初と最後の頁 41-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部善彦	4. 巻 62
2. 論文標題 研究ノート エックハルトの『教導講話』における身体性について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 キリスト教学	6. 最初と最後の頁 87-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 阿部善彦
2. 発表標題 断罪する《彼ら》の《他者》としてのエックハルトと教父的伝統：受肉による救済と誕生のいのちの教え
3. 学会等名 2023年度「キリスト教と女性」研究報告会 (岡山大学)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 阿部善彦
2. 発表標題 単純な一 をめぐる問題 ソイゼの『真理の書』における 神と神性 を手がかりとして
3. 学会等名 「新プラトン主義とドイツ神秘主義」 (第29回新プラトン主義協会大会シンポジウム) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阿部善彦
2. 発表標題 エックハルトとゾイゼは神と神性の区別を強調したのか：もう一つの生を宿す神性
3. 学会等名 中世哲学ワークショップ：中世哲学における新プラトン主義（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阿部善彦
2. 発表標題 提題「『現出の本質』でエックハルトが例外的な思想家と評価されていることについて 39節、49節を中心に 」
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会第13回研究大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阿部善彦
2. 発表標題 エックハルトの像論：受肉による救済の観点から再考する
3. 学会等名 科研シンポジウム「ドイツ・ドミニコ会とエックハルト」（主催：基盤研究（B）「ギリシア・アラビア・ラテンにおける新プラトン主義思想の伝播と発展」（19H01204））（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阿部善彦
2. 発表標題 キリストの光とかたち エックハルトを中心にー
3. 学会等名 シンポジウム「中世における光とカタチ」（聖カタリナ大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 阿部仲麻呂, 諏訪勝郎, 高橋勝幸, 阿部善彦	4. 発行年 2023年
2. 出版社 教友社	5. 総ページ数 532
3. 書名 ひびきあう日本文化と福音 三者三様のおもい	

1. 著者名 袴田玲, 村上寛, 坂田奈々絵, 阿部善彦, 鶴岡賀雄, 寒野康太, 宮本久雄	4. 発行年 2023年
2. 出版社 教友社	5. 総ページ数 261
3. 書名 西方キリスト教の女性: その霊的伝承と雅歌の伝統 (シリーズ教父と相生5)	

1. 著者名 川瀬 雅也, 米虫 正巳, 村松 正隆, 伊原木 大祐	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 350
3. 書名 ミシェル・アンリ読本	

1. 著者名 キリスト教文化事典編集委員会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 790
3. 書名 キリスト教文化事典	

1. 著者名 宮本久雄、樋笠勝士、坂田奈々絵、阿部善彦、鐸木道剛、金沢百枝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 教友社	5. 総ページ数 128
3. 書名 光とカタチ 中世における美と知恵の相生 (シリーズ 教父と相生) (執筆箇所「キリストの光とカタチ - 教父たちの「受肉の文法」とエックハルトの「離脱」 -)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------